

浪漫主義の詩王に見る詩と歌詞における表現の違い

国語班：細田 晴友、柏木 美夏、市川 進之典

Abstract

Based on Matsunaga's thesis, we studied whether there is a difference between poems and lyrics. As a result, there are many action verbs in the present tense in the poems, which means assimilation into the author's feelings. On the other hand, the past form is often used in lyrics. Ancient poems are same as ancient songs with the characteristic of being independent, but the role of current lyrics is not clear. The decline and changes in social standing of ancient ideas are thought to be reason for it. There are differences in sentence expression between poetry and lyrics, and these differences are related to roles. Modern roles differ from ancient roles, so there may be changes between them.

要約

松永による論文を基に、詩と歌詞に差があるかについて、研究を行った。結果として、詩では現在形の動作動詞が多く、作者の感情への同化を意味し、一方で歌詞では過去形が多用される。先行研究より、古代における詩と歌曲は、ともに同じような特徴を示すのに対し、現代では両者の共通点はっきりと見て取れない。その理由として古代における観念の衰退や社会的立ち位置の変遷が考えられる。詩と歌詞には文章表現の違いがあり、その違いは役割に関連している。その立場から考えると、現代における役割は古代のものと異なっているため、その間に役割の変遷があった可能性がある。が、今回の研究で深く探求することはできなかった。

1. はじめに

本研究の目的は詩と歌詞に表現形式や叙述の特徴に違いが見られるのか、またあればどのようなものか、という点を解明することである。過去の同系統の研究として、松永による論文においては、小説と詩にはテーマからの内容の展開方法であったり、述語表現について違いが見られる、との記述があった。であるならば詩と歌詞ではどのような差が生まれるのかという点を疑問に感じた。歌詞とは単に詩にメロディがついただけのものなのか、検証する。

2. 研究手法

北原白秋の同時期に作成された歌曲(童謡)と詩を同数(各9つ)用いてそれらに見られる違いを、用いられる品詞や国語表現といった観点から検証する。また、今回研究サンプルに用いる歌曲は、作詞と作曲が別の時期に行われたものは除く。

《実験1》

②詩集「おもひで」(1911)から引用した詩、及び同時期の歌曲を、使用される語彙や品詞をもとに[どこに視点があるのか]と[語り手の役割]に基づいて分類する。

《実験2》

①実験1から得られた結果を抽出し、同時期の他の作家の作品に照らし合わせ、同じような傾向が見られるかどうかを検証する。

②①より、歌詞と詩全般に対し言える結果なのか、北原白秋の作品にのみ言えることなのかを調べる。

詩と歌詞の視点移動・主観性の有無			
主観性	ある	視点移動	ない
	<ul style="list-style-type: none"> ・人生(詩) ・水ヒヤシンス(詩) 		<ul style="list-style-type: none"> ・青トンボ(詩) ・ほのかに一つ(詩) ・ちんちん千鳥(歌詞) ・この道(歌詞) ・少女の歌(歌詞)
ない	<ul style="list-style-type: none"> ・こほろぎ(詩) ・霜(詩) ・月の出(詩) ・お月見(歌詞) 		<ul style="list-style-type: none"> ・どんぐり(詩) ・謀反(詩) ・あの子この子(歌詞) ・かえるかえる(歌詞) ・かやの木山(歌詞) ・からの木山(歌詞) ・砂山(歌詞)

3. 結果

《実験1》

まず話者の視点には違いが見られた。といっても思うほど顕著な違いは現れなかったが、詩で視点、場面の移り変わりが多く見られる傾向があり、また固定の視点からの情景描写は詩よりも、歌曲により見られた。また使われる品詞という観点から見ると、詩において用いられる動詞には現在形、進行形が多く、歌曲には過去形、という特徴も見られた。

《実験2》

詩において、場面の移り変わりは体系的には見られなかった。使われる動詞には現在形が多く見られるという点では共通していた。

歌曲においては実験1同様過去形の多用、一場面についての描写といった特徴が見られた。

4. 考察

それぞれに異なる特徴が見られたことから、それぞれに異なる目的、役割があるのではないかと考えた。先行研究(松永 1965)によると、現在形は文中の存在に対する同化を意味するとあり、それに則ると、今回の現在形の多用、という特徴は、詩は著者の感情を臨場感を伴わせて表現する目的、また読者の詩の同化を促す目的がある。これは詩に古来より付されてきた祈禱的な意味合いや、詩の起源とされる漢詩のようなものの特性に見られるものがここまで引き継がれていると考えられる。しかし歌も同様に儀礼を起源としているにも関わらず、その特性は見られないため、歌曲の役割の変化、もしくは古来より続いた流れがどこかで途絶えたと考えられる。

5. 結論

研究の結果、詩と歌詞に文章表現の違いは存在する。それをそれぞれの持つ役割によるものと考えたとき、現代における役割、古来における役割が異なった原因は、その中間の時期における社会的立ち位置の変遷、もしくは古代存在していた通時的観念の衰退があったのかと考えられる。その細かな変化についての研究が今後の課題である。

6. 参考文献ならびに参考Webページ

<https://www.uta-net.com/>

https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihonbungaku/14/2/14_KJ00010055928/_pdf/-char/ja

松永信一(1965)小説表現の特性

萩原朔太郎集 宮沢賢治、高村光太郎集 (角川書店)島崎藤村集(一)(筑摩書房)